

## 瀋陽駐在員事務所



### 「紫煙薰衣草庄園」開園！

8月8日、瀋北新区に「紫煙薰衣草庄園（ラベンダーガーデン）」が開園した。総面積100万平米（サッカー場150面分）、ラベンダー畑の面積は70万平米（写真1）。この見事なラベンダー畑、実はその80%は、バーベナ（ビジョザクラ）とセージ（ヤクヨウサルビア）である。残りの20%がラベンダーだが、花はほとんど咲いていない（写真2）。これから徐々にラベンダーの割合を増やして、将来的にすべてラベンダーに切り替えるらしい。ラベンダー関連グッズの生産販売も目指している。ラベンダーの世界4大産地のひとつある新疆ウイグル地区を有する中国であるが、ここ瀋陽においては、まだまだ道半ばである。観光客がラベンダー？をバックに楽しそうに写真をとっているが、これがラベンダーではないことは誰も知らない・・・

正司 毅

## (財)日中経済協会北京事務所 札幌経済交流室



### お茶の国に日本のお茶が挑戦

中国に来て「本当にお茶が身近だな」としみじみ感じます。こちらの方は自分の水筒や容器に自分好みの茶葉を入れ、それを一日飲み続けます。ですので各オフィスには必ず給湯の設備があります。

その様な環境の中、最近日本企業のお茶が徐々に市場に出回ってきています。キリンの午後の紅茶、サントリーの烏龍茶は以前からありますが、1年程前からサントリーの『黒烏龍茶』が発売され昨今の健康ブームを追い風に好評を博しています。太り気味の小職にも大好評です。そして今年6月から伊藤園の『おーいお茶』が発売されました。上記の商品は全て現地生産ですので日本より安い価格になっています。ですが国産の商品と比べると倍くらいの価格になります。黒烏龍茶は5.5元（日本円で約70円）、おーいお茶は3.8元（同約50円）です。以前瀋陽事務所のとびっくすで取り上げられていましたが、コンビニ等で買う国産のお茶には何故か糖分が含まれており、知らないで飲むと顔をしかめてしまいます。知っていても顔をしかめてしまいます。そういった中で日本で馴染みのお茶が出て喜んでいる日本人駐在員は非常に多いです。

お茶の国、中国で日本のお茶がどこまで受け入れられるか、今後も注意深く見守りたいと思います。

中島 康成

## ユジノサハリンスク駐在員事務所

### モスクワ小旅行



少し前の話ですが、観光のオフシーズンである3月にサハリンーモスクワの往復航空券を14,280RUB（約42,840千円）で入手できたので、冬休みを利用して行って来ました。旅行中にロシアプレミアリーグ、本田圭佑が出演するCSKA モスクワとかつて巻誠一郎が所属していたアムカルによるサッカー試合があったので行こうとしたら、現地のロシア人の友人に止められました。「ロシアのサッカースタジアムは、過激な民族主義者であるスキンヘッドのたまり場。あなたのような東洋系が行ったら、殴られるか悪くすると殺される。」とのこと。そう言われてみるとサッカー場での暴動騒ぎのニュースや、試合の最中観客席で激しく小競合いしているTV中継をみたことがあります。あまりに強く止められたので泣く泣くあきらめました。2018年にロシアで開催されるワールドカップは大丈夫か？と問うたところ、「この国はやる時にはやる。国のトップが命令したら、サッカースタジアムからスキンヘッドはいなくなる。」と胸を張って言われてしまいました。

この日は、スキンヘッドがいないボリショイ新劇場にオペラ“Woyzeck”を観に行くことに変更。オペラといっても古典劇をアレンジしたモダンオペラで、縦3横4計12に分割された舞台がシーンに応じて有機的に結合（横一列や縦一列など）する斬新的なものです。これが800RUB（約2,400円）。翌日は、これ以後もう一生行かないだろうクラシックバレエ“Sleeping Beauty”を観るためクレムリン大会宮殿に行きました。前々日に飛び込みで切符を購入したのにもかかわらず前から4列目の好位置を1,000RUB（約3,000円）で確保できたので、人気ないのかなと思いきや開演直前に後ろを振り向いたら世界最大のバレエ場といわれる6,000人の席はほぼ満席でした。このほか、老舗ニクーリンのサーカスが600RUB（約1,800円）でした。これらはいずれも迫力あり面白いものでしたが、それぞれの施設の装飾が素晴らしく、綺麗に着飾った観客たちと見事に融合しておりました。このような非日常的な空間を、日常的に楽しむ術をロシア人は習慣として持っているようです。人口20万人足らずのユジノサハリンスク市にも規模は小さいですがチェーホフ劇場という観劇場があり、大陸からの様々な催しものが開かれ結構にぎわっております。

街角では、ロックコンサート開催を告げる大看板が目立ちます。ディー・パープル、ロジャー・ウォータース（ピンクフロイド）、ブライアン・フェリー（ロキシーミュージック）などでしたが、彼等が最も活躍した’70～’80年代は共産主義一辺倒のソ連時代、西側の退廃的音楽は禁止されていたのでは？と同世代のロシア人に聞くと、「みんな工夫してレコードを手に入れ、こっそり聞いていた。」とのことでした。30～40年前ですらこうですから、インターネットが普及した現代では国が情報を制御するのは不可能だと感じました。

中川 文敏